25-S(KE)

総合型選抜

経営法学科

1．指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙の所定欄に受験番号・氏名・フリガナを記入しなさい。

3．この問題冊子の不ぞろい等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に申し出なさい。

4．解答時間は80分です。

5．試験終了まで、受験者の退出は認めません。

試 験 問 題

第１問

次の**文章**は、アメリカの政治哲学者ジョン・ロールズ（1921-2002）の著作『正義論』の一部を解説したものである。この**文章**を踏まえたうえで、ABCの会話を読み、各**問**に答えなさい。

《文章》

ロールズは、「無知のヴェール」という新しい概念装置によって、①社会契約思想を修正する。

「社会契約なんて虚構だ」という批判がすでにあることを、ロールズは意識している。そして、社会契約思想家たちの言うような、「原始的な自然状態」を想定して「そこで全員がいっせいに社会契約を結ぶ」という論法にはさすがに無理がある、とロールズは認める。

そこを修正してロールズは、自然状態の代わりに「無知のヴェール」という新しい概念を、思考過程の装置として置く。そしてこう問う。「あなたがオギャーと生まれる直前の赤ちゃんだとして、どんな境遇に生まれるかを知ることのできないヴェールをかけられていたら、どんな社会を望みますか」と。

その自分が生まれる社会は、大富豪と極貧者に分かれる社会かもしれない。ほどほどの富者と何とかはできそうな貧者が混在する社会かもしれない。そして自分が生まれる境遇は、金持ちの家かもしれないし、貧しい家かもしれない。そこが「無知のヴェール」をかけられて見えない、と想定するのである。これが、社会契約思想の「原始的な自然状態」に代わるロールズ流の想定である。

そしてロールズはこう推論する。「こう問われた人の多くは、自分が最悪の境遇、その社会ではもっとも貧しい家に生まれる場合を考えて、最も不利な立場の人でも何とかはできそうな社会がよい、と答えるだろう」と。大富豪と極貧者に分かれる社会よりも、富者もほどほどで貧者もほどほどという社会のほうがマシで、自分が生まれる家を前もって知ることができないなら、後者の社会に生まれたいと思うはずだ、と言うのである。

出典：徳永哲也『正義とケアの現代哲学：プラグマティズムから正義論、ケア倫理へ』（晃洋書房、2021年）（出題にあたって一部改変した）

《会話文》

A「私はロールズの意見に賛成だね。自分がもしとても貧しい家に生まれてしまって、病院にも行けないリスクを考えたら、少しくらいは平等な社会に生まれたいから」

B「そうかな。ロールズの意見は、おかしいと思うよ。ロールズが言っているのは、1000万円を [x] %の確率でもらえる権利と、[y] 万円を確実にもらえる権利とがあったら、後者のほうがいいってことだよね」

A「それのどこがおかしいの？」

B「1000万円を [x] %の確率でもらえる権利の期待値は、[z] 万円、[y] 万円を確実にもらえる権利の期待値は、40万円でしょ。前者の期待値は後者の２倍。同じように、②極貧に生まれる心配をするよりも、大富豪に生まれる可能性に賭けたほうがいいかどうか、計算すればいいんだ」

A「そうかなあ、Cさんは、どう思う？」

C「私はロールズに賛成はしないけど、Bさんが言っていることもおかしいと思う」

A「つまり？」

C「人生は一度きりだから、何回も試すことはできないよね。Bさんは、飲んだら10億円がもらえる代わりに、50%の確率で死ぬ薬と、飲んでもなにももらえないけど、毒性がまったくない薬を渡されたとき、死ぬ可能性のある薬を飲むの？」

B「飲むよ。だって前者の期待値は５億円じゃない」

A「ええ？　ほんとう？　自説を変えたくなくて、意地を張っているだけじゃないかなあ。ところで、Cさんはなんでロールズに賛成しないの？」

C「Aさんみたいなゴリゴリの確率論者は説得できないからだよ。無知のヴェールのもとで、みんなの意見が一致するわけがないよね」

A「うーん、このまえの授業で、③相対的貧困率を習ったよね。④大富豪と極貧のひとのあいだの格差が小さくなればなるほど、相対的貧困率は低くなるから、格差の小さな社会のほうが、いいんじゃないかな」

問１　**会話文**のｘｙｚに入る数字をそれぞれアラビア数字で答えなさい。

問２　**文章**中の下線部①について、17世紀に存命した社会契約思想家の名前をひとり答えなさい。

問３　**会話文**中の下線部②について、Bがこの下線部②で主張していることは、**文章**中のロールズの考えによれば、成り立たない。その理由を、〈無知のヴェール〉という単語を必ず使って、50文字以内で述べなさい。

問４　**会話文**中の下線部③について、次の相対的貧困率の定義を読んだうえで、**表１**のような５つの世帯から成る社会の(1)等価可処分所得の中央値、(2)貧困線、(3)相対的貧困率をそれぞれ答えなさい。なお、各世帯はすべて、父母および子２人の計４名から成ると仮定する。

【定義】
等価可処分所得（世帯の可処分所得（総所得から一定の支出を除いたもの）を世帯人数の平方根で割った所得）の中央値の半分を「貧困線」と呼び、その貧困線未満の等価可処分所得しか得られていない世帯員（世帯を構成する各人）の割合を「相対的貧困率」と定義する。

表１

世帯名	サトウ	スズキ	タカハシ	タナカ	イトウ
世帯の等価可処分所得（単位：日本円）	１億	5000万	600万	300万	200万

問５　**会話文**中の下線部④について、**問４**で与えられた相対的貧困率の定義にしたがうかぎり、下線部④のAの発言は成り立たない。その理由を50文字以内で説明しなさい。

第２問

問１　次の**表**は、会社の雇用形態のうち、ジョブ型とメンバーシップ型の相違点について示したものである。欧米諸国と日本に多くみられる雇用形態として、表中の①～⑧にそれぞれ当てはまる最も適切な語句について、後の**語句欄**の（ア）～（ク）から該当する記号を選択し、表を完成させなさい。

	ジョブ型	メンバーシップ型
導入国	欧米に多い	日本に多い
職務内容	決められた職務以外のことはしない	人事異動があり、違う職務を経験する
採用方法	(①　　)	(②　　)
賃金	(③　　)	(④　　)
解雇	(⑤　　)	(⑥　　)
職業訓練	(⑦　　)	(⑧　　)

《語句欄》

（ア）　会社の業績が悪くなって職務がなくなれば解雇される
（イ）　年功的に賃金が上がる
（ウ）　新卒時に一括して採用され、定年で退職する
（エ）　会社内での訓練が必要
（オ）　会社の経営が厳しくなっても簡単には解雇されない
（カ）　同じ職務をしている限り賃金は大きく変わらない
（キ）　会社が必要なときに労働者を採用する
（ク）　会社の外で職業能力を身につける

出典：本設問については、朝日新聞朝刊「いちからわかる！雇用を「ジョブ型」に　日本でも広まる？」(2020年6月22日）の記述をもとに作成した。

問２　次の**エッセイ**および**新聞記事**の内容では、著作権法に規定されている権利である著作者人格権のうち、同一性保持権について言及されている。この同一性保持権の特徴について端的にまとめたうえで、「セクシー田中さん」事件（騒動）がどのような点で同一性保持権侵害に該当するのかについて、**エッセイ**および**新聞記事**の内容に言及しながら説明しなさい。(600字以内)

《エッセイ》

脚本家になって四十年以上経つから、現場で台本を変えられたという経験は多い。多いが、事前に了解を求められたり、収録後に知らされたりしたので、意に沿わない改変は殆どなかったし、現在に至るまで、有難いことに一件を除いては、悔しい思いをしたことはない。

その一件というのは、三十年ほど前に書いた四回連続のドラマにおける台本の改変である。その時のことは、胸の奥にいまだにしこりとして残っている。

作品の編集作業を終え、放送を前にしたある日、プロデューサーが出来上がったテープを持参して、ラストシーンの収録時、台本にはない演出がされたと詫びたのである。

最終回である四回目の、ドラマ全体のラストシーンを見てみると、台本に書いた流れとは違う方向に進み、意図しない結末になっていた。

プロデューサーによれば、出演者諸氏と演出家のアイデアが盛り上がった結果だという。そのシーンの途中までは台本通りだったが、大詰めで変わった。作品全体の根幹に関わるものではなかったが、ラストシーンに託した僕の意図もその意味も、消えていた。申し訳ないと詫びたものの、プロデューサーの口から、ラストシーンを収録し直すという言葉はなかった。ドラマの舞台となった地方でのロケに売れっ子の俳優を再度集めることは不可能ということなのだろう。

怒りや抗議をぶつけても、相手は恐らく申し訳ないというばかりで、撮り直しはするまいと踏んだ。

小心者の僕は、不機嫌に黙るしかなかった。

もし三十年前、著作権法に『著作者人格権』があり、『同一性保持権』というものがあると知っていたら、ほかの対応の仕方があったかもしれないと、思わなくもない。

『同一性保持権』とは『その著作物及びその題号の同一性を保持する権利』を有すとあり、著作物の内容やタイトルを著作者に無断で変えることはできないと規定されているというのだ。だが、人格権を盾に再収録を要求していても、相手が受け入れたかどうかは分からぬ。既定の原稿料のほかに謝罪の金額を払うと言われたとしても、僕が欲しいのはお金ではなく、『著作物の同一性』なのだから、お金で済むことではなかった。

なにも一言一句変えてはならないと言っているのではない。

収録や撮影現場の状況、ロケ現場の天候、スケジュールなどの問題で台本を変えざるを得ないことは多々ある。演者や演出家が台本とは違う芝居なり台詞を思いつくこともある。そういう時、多くの場合、プロデューサーから連絡があるし、律儀な演出家は、変えたい箇所を自分で手書きして、ファックスで送ってくれたりする。

そのアイデアを了承することもあれば、違うということもある。

そんなやりとりをするのが当然であり、物づくりの基本だし、ひとつの作品作りに関わる者の信義ではないか。

三十年前の、あの作品に関わったプロデューサーや演出家は、『どうして一言、著作者に連絡しなかったのか』という疑問に、いまだぶつかる。

台本の改変に関して手ひどい目に遭ったのはその一件のみで、今日まで、台本の改変に関しては演出家などと意見の交換をするのは当たり前のように続けている。

台本を無断改変して放送したプロデューサーと演出家は、その時、強い抗議をしなかった僕が、許したと思っていたかもしれない。あるいは、泣き寝入りをしたと思ったとすれば癪だから、当時、そうではないという気持ちを示すにはどうすればいいかを考えた。

そこで決めたのが、〈この二人とは、二度と仕事はするまい〉であった。

せめてもの抗議だった。

その思いが届いたのかは不明だが、その後、その二人から作品の依頼が来ることは今日までないが、それで損をしたとは、微塵も感じていない。

出典：金子成人「『あとの祭り』」コピライトNo.723 Vol.61（2021年7月）1頁。

《新聞記事》

（社説）創作者の権利　交渉のあり方見直す時

日本テレビ系で放送されたドラマ「セクシー田中さん」の原作者で漫画家の芦原妃名子さんが１月に急死した問題で、日テレと版元の小学館が調査報告書を公表した。

報告書からは、原作者が著作者としての権利の実現に過大な労力を費やしたり、脚本家が尊厳を脅かされる経験をしたり、２人の創作者が苦労したことがうかがえる。

著作者の精神的利益を守る「著作者人格権」の一つとして、著作物を勝手に改変されない権利がある。映像化に際し原作への忠実さをどれだけ求めるかは原作者により違うが、今回は強く求めていた。しかし日テレ側がそれに応じるまでには、小学館側からの再三の働きかけを要した。

もっとも原作者の言葉からは、改変自体というより、「作品の根底に流れる大切なテーマを汲み取れない」改変だからこそ許容できなかったことがうかがえる。

原作には、時に性別によってふるまい方や生き方を縛られてきた登場人物たちが、徐々に変わる様子が描かれる。たとえばそうしたエピソードの意味合いが失われるように設定が変更された脚本案について、「原作のジェンダー要素も逃げずに書いて欲しい」という趣旨の苦言を呈していた。ブログでも、性被害未遂、男性の生きづらさなど、「作品の核として大切に描いたシーンは、大幅にカットや削除」され、納得のいく理由は聞けなかったとつづった。

「大切なテーマ」を汲み取れなかったのか。汲み取ったが入れなかったか。日テレの報告書は立ち入らない。著作者人格権が保護されるのは、著者の人格が著作物に表れているからだ。その根本に立ち返っての検討が必要だった。

限られた制作期間。深まるコミュニケーション不全。その中で脚本家もまた翻弄された。小学館側のそれまでの要求内容の全体像を知ることができないまま、原作者の要望を受けた日テレに突然降板を迫られ、一部の回は最後に名前も表示されなかった。

２人が制作過程での困惑をSNSに投稿すると、ネット上で物議を醸した。そして原作者は亡くなった。

創作や文化芸術の現場には、「あらかじめ物事を決めすぎると創造性を妨げる」という考え方も根強い。しかし権利が理不尽に侵されないことは、創造性以前の問題だ。あいまいにされがちだった創作者の権利を確認・保護する動きは業界内外に広がる。

両報告書の提言の通り、交渉に際し意向や考えを書面で示すことを出発点に、交渉や契約のあり方を見直す時だ。

出典：朝日新聞朝刊（2024年６月９日、一部改変）

問題はここまでです